



この世とは

下

永井路子

新潮社

この世とは 下

永井路子

新潮社版

この世をば 下

定価 一〇〇円

昭和五十九年三月二十五日発行
昭和五十九年四月三十日二刷

著 者 永井 路子

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮社



東京都新宿区矢来町七十一番地
電話 東京 (266) 五一一一 (業務)
東京 (266) 五四二一 (編集)
振替 東京 四八〇八千一六二

印刷 二光印刷株式会社
製本 大口製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Michiko Nagai, Printed in Japan, 1984

ISBN4-10-352002-7 C0093

この世をば
下・目次

炎 の 章	黄 ^よ 泉 ^み への道	二人のきさき	和歌 屏風	内憂 外患	乳 房	見えざるいのち	覇者の妻
-------------	--------------------------------------	--------	----------	----------	--------	---------	------

167	146	129	95	70	56	29	7
-----	-----	-----	----	----	----	----	---

史料のことなど	虧 ^か けゆく月	恋しかるべき	魔の翼	夜の ^く 水 ^い 鶏 ^な	魔 ^{えん} 魅 ^み の法師	白 ^き 帳 ^{とばり}
---------	---------------------	--------	-----	---	------------------------------------	---------------------------------

この世をば
下

覇者の妻

すさまじい夏の日照りであった。

道長と倫子^{りんし}の住む一条邸の、かなり広い池の面に、小波ひとつ立たないのは、そよとも渡る風がないからだ。人も木も大地も、すべてをじんわり包んで離そうとしないう都の熱気は毎年のことだが、それにしても今年は、曇ることさえ忘れたような連日の晴天である。そのしつこさに、さすがに呆れはててか、池の水さえ不機嫌にくすんでいる。

が、あるじの道長夫妻は、その暑さもさほどこたえていないらしい。思いがけず転がりこんできた幸運に、胸をわくわくさせているからだ。とりわけ、倫子は、

——運の強いお方なのだわ。

うっとり道長を眺めずにはいられない。

——今年のお正月、この方が政界の第一人者になるな

んて考えてもみなかったわ。

そのころ夫の上座には六人の公卿^{くぎょう}がひしめいていた。そのほとんどが悪疫^{くわい}のおかげで姿を消すなどと誰が予想できたろう。それに東三条院詮子^{せんし}の強引な後押しがなかったら、危うく甥^{えい}の伊周^{いしゅう}におくれをとるところだった。

倫子はいまさらながら義姉の詮子の実力に舌を巻くと同時に、土御門^{つちみかど}の邸を提供したことが、思いがけないほど大きく報われていることを感じざるを得ない。

——あのときは、とっきの思いつきだったけれど……。頼りになるお方のためならと、自分たちの邸を明け渡したとき、倫子自身の胸の中にはさほど打算が働いていたわけではなかった。計算づくでなかった提案であったことが、いまの倫子の心を明るくしている。

倫子の母、穆子^{ぼくし}——夫に先立たれ一条の尼上と呼ばれ

ている彼女はもっと無邪気である。

「こうなる方だと思っていましたよ」

齒のない口をもぐもぐさせて言う。何しろ夫の雅信まのぶの反対を押しきって、道長を婿ときめたのは彼女なのだから……。

長徳元（九九五）年六月十九日、三十歳の道長は右大臣に任じられ、同時に氏の長者となった。左大臣は空席だから、事実上のトップである。このところ、倫子の眼にも、夫はかなり貫禄がついたようにみえる。依然左大将を兼ねているから、外出の際は、ものものしい随身を従えての威風堂々の行列となる。

それに応じるように、夫は歩き方から変ってきた。顎をひき、腹をつきだすように静々と進むのだ。

「殿……」

家来が何か言上しようとする、顎にいつそう力を入れて、おもむろにふりむく。どうやら「御貫禄」の秘訣はこの辺にあるらしいと、倫子は首をすくめた。

「あなた、宮中でもそんなふうにしていらつしやいますの」

夜の床の中でたずねると、道長はけろりとして言った。「そりやあそудだ。ついこの間まで権大納言くんだんごんだったから

な、ちつとは貫禄をつけにやならん。なにしろ地位は下でも俺より年上の連中が揃っているんだから」

立ち聞きする者があつたら、何をくだらない、と眉をしかめそうなの風景も、まあ大目に見てやろうではないか。道長夫妻のこの太平樂はほんのつかのまのことだったのだから。

後になって思えば――

不吉な予兆は、道長が右大臣になった直後に、すでにあらわれはじめていたのだった。祝客でこつたがえす道長邸に、慌しく近衛このゑの舍人とねりが馬を飛ばしてやつてきたのが二十一日の夜。

「火が、火が……」

息をきらせて近衛の舍人は報告した。

「右近衛府の倉から出火いたしました」

変事はただちに家司けしから道長に伝えられた。

「なに？ 火が……」

瞬間頬をびりりとひきつらせた道長であつたが、

「大事に到らぬよう手配せよ」

短くそれだけ言つて、すぐ平靜な表情に戻つたのは、祝の客の手前を憚はばつてのことであつたかもしれない。

が、道長のそばにいた倫子は、夫の表情の変化を見逃

さなかった。と同時に、妙に胸騒ぎがした。

——夫の右大臣就任直後の出火とは……。何者かの嫌がらせではないだろうか。

ただの不始末による出火とは思えなかった。人々に気づかれぬように、そとと賛子（縁側）に出てのび上がつて見ると、思いなしが右近衛府のあたりの空が朱色を帯びていた。

——大事にならなければいいが。

いままでは単なる世の中の一事件でしかなかった火事についても、別の気遣いをしなければならぬことを、倫子は、はじめて思いしらされたものだつた。

もつとも火事は大事にいたらずに済んだし、倫子もこの夜の胸騒ぎを忘れるともなく忘れた。ひきもきらずに訪れる祝の客にかこまれての華やかな日々酔っていたといえるだろう。

倫子の見るところ、夫は日ましに政界の第一人者としての風格をそなえてきているように見える。若いだけになかなか意欲的でもある。

ただの幸運児ではない、ということを見せるために、意欲的に政治に取りくむつもりだ、としばしば言いもした。綱紀の肅正、政治の建直し。そのための官庁の実態

調査、員数の把握、その上での官僚に対する信賞必罰……。

「もう中には手をつけはじめていることもある」

誇らしげに、夫はそのことを語った。

しかし倫子はそのうち、彼の口数が少しずつ少なくなってきたのに気がついた。そしてある日、あつと息を呑むほど峻しい表情をして夫は宮中から帰ってきたのである。顎をひいて静々と歩くことも、すでに彼は忘れていた。

「あなた、どうかさいまして？」

ただならない夫の顔色に、思わず倫子はそうたずねずにはいられたかつた。

「いや、何でもない」

口ではそう言うが、何か尋ねられることさえ煩わしい、という表情をしている。

こういうとき、彼女の手足となつて働くのは、側近に仕える侍女たちである。その中の一人、赤染衛門あかぞめもんは歌もうまいし、気もよく廻る。夫は大江匡衡おほえのまひらという学者である。

倫子は赤染衛門をそつと呼びよせた。

「殿のお顔色がひどく冴えないのです。宮中で何か大き

な事件でもあったのではないでしようか」

「左様でございますね、私も殿さまをお迎えしたときから、そのことを御案じ申しあげておりました」

さすが才女は勘が鋭い。早速手を廻したらしく、まもなく、

「北の方さま……」

声をしのばせて、倫子の局に入ってきた。

「内裏では大評判になっておりますそうで」

「何が？」

「今日、殿さまが内大臣さまと大口論をなさって」

「まあ」

胸つぶれる思いの中でやはりそうだったのか、と倫子はいうめいた。あの伊周が黙っているはずはなかったのだ。

「それもつかみあいにもなるかと思われるほどの激しさで、お二人のお声は外まで洩れたとか」

ふつう公卿の会議は、内裏の中の近衛の詰所である「陣」で行われる。道長と伊周の口論の声が、その陣の

座の外までも聞えたというからには、定めて怒鳴りあいに近いものだったのであろう。こういう事件はたちまち宮中全体にひろがる。それで赤染衛門は夫の大江匡衡あたりから聞きだしたのだろう。

倫子は頬から血の気のひく思いであった。

「まあ、どのようなことで言い争いをなすつたのかしら」

「さあ、お話の中味までは……」

大江匡衡は公卿ではないから会議に連なつてはいない。内容までは聞き知り得なかつたのだろうが、それにしても、右大臣と内大臣が会議の席上大げんかをするとは前代未聞だ。伊周はなかなかのもの知りだし、短い期間だが、文書内覧をつとめた経験もある。そうでなくとも知識をひけらかしたいこの若者は、道長の神経を逆なでするような批判を加えたのに違いない。

「右府はそのようなことも御存じないのか」

道長は満座の中で恥をかかれたのであろう。倫子には夫の無念さが手にとるやうにわかつた。夫は多分我慢できなくなつて大声をはりあげたのだ。しかし、理由はさておき、一座の首班たるものが下位の者と大声をあげて口論することは大失態である。

——伊周をおさえきれなかつたことで、夫は統率力不足を暴露してしまつた。

伊周は頭もいいし、若いころ弁官になつて実務の修業もしている。それにここ数年、道隆の片腕として実際に

政務に関与しているから、夫が押され気味なのはわかっている。このころの政治は思いつきの独裁政治では決してない。故事先例の尊重、といえ古めかしいが、いわば六法全書や判例等に相当する律令の条文や格式、過去の実例等を頭に叩きこんで渡りあうのだから、無知、経験不足はたちまち軽蔑されてしまう。

——それに陣の座の外まで聞えるような大声で怒鳴りあうなんて……。

噂はたちまち宮廷中を駆けめぐるのであろう。倫子は人の嘲笑が聞えてくるような気がする。

「やはり権大納言から一氣に首班になるのは無理というものよ。おさえはきかないな」

「姉君に尻を押されて、やつと擱んだ幸運なものな」

太平楽の夢は一時に吹飛んだ。

幸運というもののおそろしさが、はじめて倫子をさいなみはじめる。たしかに夫は運がよすぎた。その代り、これからはいやというほどその代償を払わされるだろう。現代と違って、簡単に公卿の首をすげかえることのできない時代である。とすればこれから先、ずっと伊周にからまれ続けるというわけか。

——地獄だわ。幸運という名の地獄……。考えただけ

でもぞっとする。

——誰か夫を助けてくれる者はいないのか。

倫子が公卿の顔ぶれに関心を持ちはじめたのはそのときからだ。道長は右大臣になると同時にかなり大幅な人事異動をやっている。疫病で死んで空席になっている地位を急いで埋める必要もあったからだ。

大納言朝光の後はその異母兄の中納言顕光が、同じく濟時の後には、道長の叔父にあたる中納言公季が坐る形になったが、いずれも凡庸な人物だ。顕光にいたっては魯鈍に近い。十五、六も年の違う弟の朝光にずっと追いかされ放しでいたのだから。

倫子の異母兄にあたる時中、扶義といった連中も順送りに出世してはいるが、彼らが毒にも薬にもならない人間であることは彼女自身がよく知っている。

——みんな頼りにならない人ばかり。

ためいきをつきたくなってきた。

おまけに参議には、うるさ型の実資が控えている。伊周の味方にはなるまいが、人一倍ものの知り度文句の好きな御仁ときている。

しかも伊周には、強力な味方がいる。実弟の中納言隆家だ。

その顔を思いうかべたとき、倫子は嫌な予感がした。

隆家、十七歳。参議の経験もない彼が、この四月、一躍権中納言にのしあがったのは、瀕死の床にあった父道隆と、当時文書内覧だった兄伊周の強引な人事作戦のおかげである。他の人間とのバランス上、道長は、最近彼を正中納言に転任させている。

そのもののしい肩書が滑稽に見えかねないほどの年頃だが、それが案外誰の眼にもおかしく映らないのは彼自身の肝魂きもたましいのなせるわざか。兄の伊周ほど博学ではないが、その分だけ向う気が強く、こわいもの知らずのところがある。

——伊周どのにはこの上もない頼もしい味方だろうけれど……。

強気な隆家の気性をうけて、従者に乱暴ものが多いというのが倫子には気がかりなのである。彼らは驚くほど主人の心情に敏感だ。主人たちの間に微妙な感情の対立があるとき、すぐさま乱闘事件を起したりする。

「御主人さまの代りに、奴らを撲りつけておいてやりました」

中には手柄顔をする者もいる。腕つぶしの強さを買われて召しかかえられているのだから、お役に立つところ

を見せなければと思っているのだろう。それが勢に乗じて拡大すれば、どんなことになるか、倫子は気にせざるを得ない。

「御参内の途中は十分御注意遊ばして」

が、道長はあまり気にもとめない様子である。

「なあに案ずるな。第一俺は左大将だ。れっきとした隨身もついている。指一本ささせるものか」

「でも……」

そしてまもなく、倫子の予感は、気味が悪いほどの中してしまふのだ。宮中で口論のあつた数日後、都大路で道長と隆家の従者が、ささいなことで口論となり大乱闘をやつてのけたのである。幸い、このとき道長も隆家もその場には居あわせなかった。従者たちだけで都大路をのしあるいていたときに起きた事件だが、いったん撲りあいのはじまると、

「それっ」

待ちうけてでもいたように、お互いの邸から加勢がく

りだし、大騒動になった。

「けんかだけんかだ。みんな来い！」

「けんか？ どこだっ」

「七条大路だ、急げっ」

わめき声は倫子たちのいるところにまで響いてくる。

「まあ、何ということでしょう」

相手が隆家の従者と聞いて、倫子は色蒼ざめてしまふ。

騒ぎは益々大きくなるばかりで、遂には検非違使^{けんぴゐし}庁^{ちやう}の役人、つまり警官が出勤して鎮定にあたる始末、わが邸にも頭をなぐられたり、鼻から血を出した怪我人がかつぎこまれたと聞いて倫子はおろおろする。

「命は？ 命は大丈夫なのでしょうね」

この日の騒ぎは、検非違使別当でもある実資が日記に「合戦アリ」と書くほどであつた。

乱闘の折、怪我人の出たのは道長側だけではなかつた。いやそれどころか隆家側には矢にあたつて重傷を負つたのがあるとかわかつて問題はこじれはじめた。ただの取っ組みあいや撲りあいではない、これは現在の発砲事件に相当する。

「急所をはずれたからいいようなものの、もう少しで生命を落すところだつた」

隆家側からは猛烈な抗議がきた。しかし道長側の従者の言い分はこうである。

「手出しをしたのは向うだ。数人できるところに多勢で襲いかかつてきた。何とか騒ぎを鎮めようとしたのだが、

相手はますます数が増えるばかりで……」

そこでやむを得ず威嚇射撃をしたまでだ、というのである。お互いが正当性を主張し、報告書を提出してなおも争い続けた。

若い隆家は、負傷者を出したことが無念でならない様子である。最強を誇つていた従者群に傷をつけられては心おだやかではいられないのだ。

——それも矢を射かけてくるとは何事だ。ようし、覚えておれ。

その日から、眼付の悪いのが道長邸のまわりをうろうろしはじめた、と聞いて、倫子は胸つぶれる思いである。

「殿の御身辺をしっかりと守るように」

侍女を通じて隨身や従者に言いつけた。

「それはもう万全を期しております」

頼もしい答が返ってきたが、しかし虚をつかれるような形で事件は起きた。道長こそ狙われなかつたが、隨身の一人が、殺害されてしまったのだ。

秦久忠^{はらのひさただ}というその男が、

警固の役を終えて道長邸を退出した後、路上で何者かに襲われた。物蔭にひそんでいた相手はよほど手だれの射手だったのだろう、矢は過ま

たず久忠の喉笛を射とおしていた。隨身に選ばれるほどだから、久忠も一応のたしなみはあったはずなのに、とつさのことで、避けきれなかったとみえる。人通りの少ない路上での夕闇にまぎれての犯行だったので、発見されたとき、久忠は仰のけに血の海に倒れたままこときれていた。

むろん犯人はたちまち姿を消している。が、これを命じた人間は直ちに推察がついた。久忠は数日前の七条大路の大乱闘の折に、隆家の従者に矢を射かけた中の一人だったからだ。

——借りは必ず返す。いいな。

見えざる犯人はそう言っているようだ。そしてその背後にいる隆家も……。

変事を知らされた倫子は、

「まあ、久忠が……」

眼の前が真暗になり、気を失いそうになった。親しく言葉を交わしたことはないが、道長にこころ扈從するその姿には見覚えがある。その久忠が、こんな形で非業の死を遂げようとは……事態はいよいよ悪化してゆく。

隨身というのは、下僚とはいえ近衛府の役人である。その一人が殺害されたとあっては、棄ててはおけない。

しかも、直接の犯人はわからないにしても事件の輪郭は、はつきりしている。道長は隆家に犯人の引き渡しを厳命した。が、隆家は、

「私の従者が犯人だともおっしゃるのですか。とんでもない言いがかりだ」

と、うそぶくばかりだった。

「私は何も知らない。従者に命令した覚えもない」

十七歳の少年は、ぬけぬけとしらをきった。

——小僧め。

齒齧みする思いの道長は、ついに最後の手段に訴える。一条帝のめい綸旨という形で、犯人を引き渡さないかぎり隆家の参内を禁じる、と申し渡したのだ。

それでもしばらくは隆家は言を左右にして抵抗したが、そのうちやつと従者の一人を犯人として検非違使庁に出頭させた。が、彼自身はこの事件で敗北したとは決して思っていない。

「あつち俺の従者を二人怪我させたが、俺の方は一人を殺した。さしひき、俺の勝だ」

こわいもの知らずの少年は、いよいよ意気軒昂、そう放言して憚らなかつた。

「これからもこの手でゆけ、なあに道長なんかにおびえ